

さくら第555号

令和8年 3月

# さくら

発行所 さくらそろばん  
発行者 平瀬重雄  
春江町境 17-7・TEL51-1337  
hirase@mx2.fctv.ne.jp

梅が香に 障子開ければ 月夜かな 季語 梅 小林一茶 梅の香にさそわれて 障子を開ければ美しい月が見える。



## 『感謝と当たり前』

第25回2026年冬季オリンピックがイタリアのミラノ・コルティナで2月6日から22日まで開催され、日本からは男子47名、女子74名の計121選手が参加しました。

93国から3500人以上が8競技116種目に挑戦し、自己ベストをかけて戦いました。その結果の獲得メダル数の1位はノルウェーで金17、銀10、銅10の合計37個であり日本は金5、銀7、銅12の合計24個で10位でした。

期間中は終日、テレビや新聞でその活躍の様子が報じられ誰もが感動し興奮して声援を送っていました。

中でもフィギュアスケートの「りくりゅう」こと三浦璃来・木原龍一ペアは前日に5位となりましたが翌日の決勝では世界最高得点を出し、見事金メダルです。優勝インタビューで「諦めない強い気持ちは階段になって頂上まで連れていってくれる」との言葉に感動しました。

4年間1461日もの間、ただひたすら練習を積み重ね工夫と改善の繰り返しの中から得た結果の金メダルです。

オリンピックのモットーは「あなたらしさ」でありいかにして自分の良さを引き出し表現するかです。このことは普通の人間にとっても当てはまることです。

ところで、オリンピックでの各選手が語るのは「感謝」という言葉です。チームにかかわる選手、監督やコーチにスタッフ、そしてまた常に自分を支え励ましてくれる家族や友人などに対しての「ありがとう」という思いが感謝となって自然に発せられるのです。

この反対は「当たり前」です。人間は習慣や慣れから一度経験した行いを当たり前と感じ

やすくなります。この気持ちが強くなりすぎると感謝の気持ちが消え、もっとやってくれるだろうという期待が強くなりすぎることがあります。

さて、「感」という字は「口+戈(武の一部のほこ)+心」で出来ています。この口は神様への祝詞(のりと)を入れる箱だといえます。

神様への祝詞を入れた箱を奪われないようにしっかりと守っておくと、夜中に神様がこっそりきて祝詞に示された気持ちに伝えてくれるそうです。神様の心が動くことが「感」です。

「謝」という字は「言」+「射」で成り立ちます。射は弓を射るように相手の心に言葉を届けるといえます。弓を射るとは古代中国では狩りに使うだけではなく重要な儀礼の時に弓を射ることが祭礼として行われる「お祓い」的なものでした。

「感」という漢字は、心が強く動かされることを意味します。「感」はすべて、広く及ぶという意味を持ち「心」は気持ちを指します。そして、心が広く揺れ動く、深く何かを感じるというようになりました。つまり感という言葉には単なる感情の動きではなく、何かによって深く心を動かされることが含まれています。

「謝」という漢字は、礼を述べる、お礼を言う、詫びるという意味があり、射は矢を放つ、まっすぐに伝えるという要素から、自分が受けとった恩恵に対して感謝の心を持つことが大事といえます。すべてのものはつながりの中で成り立っており、私たちは他者の支えなしには生きられないとされています。

3月は人生の大きなターニングポイントです。これまで歩んできた事が総まとめされ入試、就職、新学年での新しい自分の生活サイクルが決まります。

過ぎ去りし日々の出来事に家族の思いが詰まっています。何事も当たり前と思わず、常に感謝の気持ちを強くもち受けた恩恵にありがとうの言葉を忘れず、まい進してください。

感謝の気持ちは、自分自身を幸福にし、周囲の人々との関係を豊かにする力を持っています。日常のなかで小さな感謝を積み重ねることで心の豊かさははぐくみ、前向きな人生を歩んでいく手助けとなります。感動した心を言葉や態度で示していきましょう。